

---

## かつての家づくり

---

### かつては“職住一致”だった

戦前あるいは戦後まもなくまで、日本の住宅は、職業と生活が一致する“職住一致”が一般的だった。庶民の住宅＝民家は、主に農家と町家（商家）に大別された。例えば長野県中部の旧四賀村（現・松本市）の場合、江戸時代の農家の主要産業はタバコだったが、明治中期になると養蚕へと変化、江戸時代には小屋裏でタバコを干すのに萱葺きの階高の住宅が建てられ、大正期にかけては蚕を育てるのにより広い空間が必要となり、総2階瓦葺きの大屋根住宅が建てられるようになった。

この地域に限らず、当時の施主（家を建てる依頼主）たちはそれぞれ、地域の大工や職人たちと密接な関係を保ちながら、その地域特有の風土や生活の必然性をもとに、独自の建築技術、建築を含めた地域の文化、結果として地域特有の景観を育んできた。

### 100年前の家づくり 素材は木と土の地産地消

100年ぐらい前の昔の家づくりでは、家を頼む施主と家を建てる職人の関係が近いのが大きな特徴だった。当時の慣例として、施主は地元の棟梁に相談・依頼。棟梁は施主の家の事情を知り、どんな家を建てたらよいか的確なアドバイスができたようである。

棟梁は仕事の依頼を受けると、材料の準備にとりかかった。昔の



家は山にある木材や粘土などの自然素材が建材の中心で、近くの山や土地から原材料を調達した。棟梁は山に入り木を選んで、きこりが伐採しじっくり乾かした。経年変化で曲がりやねじれといった大きな変形が生じ、切りたての木はすぐには使えないためだ。

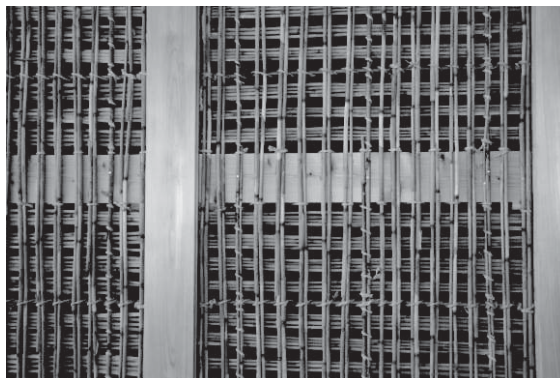
昔の家は、太い大黒柱や曲がりくねった大きな梁などのイメージがある。旧四賀村の大正期の場合、大黒柱には檜（ケヤキ）、土台には水に強い栗、梁には強度の高い松、柱には檜（ヒノキ）や松を使用。檜や杉などの扱いやすい針葉樹は高級材で広葉樹が多く使われていた。このため、いまの家のように設計に基づいて材料の種類や大きさを決めるのではなく、材料に合わせて家づくりが考えられていた。

左官の材料（土壁に使用する材料）も、山や川から採取した。旧四賀村の場合、土壁の下地となる小舞（コマイ）には、湿気の多い河川敷などに生える葦（ヨシ）を集め、比較的手近な場所から粘土質の土を採取し、乾燥後のひび割れなどを防止するつなぎと

して稲や麦などの藁（ワラ）を使った。こうした材料の準備だけで、概ね3年ぐらいかかったようである。

### 大工と左官が大活躍、素人も家づくりに協力

昔の家は、大工や左官などの高い専門技能者だけでなく、素人も家づくりに参加していた。土壁の下地作業である小舞、萱葺きなどは、近所の人を手伝って仕上げた。世界遺産の白川郷や京都府美山町の人たちが萱葺きの共同作業を行なう風習が現在でも見られる。



土壁の下地となる小舞

当時の家づくりでは、表に見える部分の大半は職人が仕上げ、見えない部分は一般の人が手伝っていた。梁や柱

は大工が仕上げ、壁は左官が仕上げ、家づくりの大半はこの2業種で成り立っていた。

このような材料の組み合わせを「算段」といい、算段の善し悪しが棟梁の腕の見せどころでもあった。棟梁はさらに、それぞれにくせのある木の特性を1本1本見極めて木の配置を決め、墨付けをした後、ノミと金槌を使って仕口や継ぎ手を手刻みし、いわゆる木造軸組構法により住宅の主要構造を組み立てていった。棟梁は家づくりの要として材料選びから家の設計、実際の工事までを一手に取り仕切っていた。

### かつては職人に直接仕事を依頼していた

住宅を含めて戦前の建築工事では“直営方式”が主流だった。それが現代では、建築工事一式を建築会社に任せる請負契約が主流になっている。請負契約では、建築会社が工事完成までの一切の責任を負い、専門工事の職方に下請として仕事を発注する方式。施主は、建築会社と工事請負契約を結び、住宅建築の場合は、着工前、中間、完成後の3段階で工事代金を建築会社に支払っている。これに対し、戦前や戦後まもなくの頃までは、棟梁が設計と施工の全体管理と大工工事を担い、その他の専門工事については、施主が職方に直に仕事を依頼、出来高に応じて代金を支払っていた。施主はそれだけ建築自体に本腰を入れて関わり、職方との信頼関係のもとで建築行為が営まれていた。

日本の各地域には、それぞれの家呼び表す屋号という慣習が根付いていた。屋号には、建具屋、畳屋、鍛冶屋といった建築や関連産業の生業が使われているケースも少なくなく、営繕工事は、そうした地域の馴染みの職人に直接依頼したものだった。ところが、現代では、地縁も薄れ自分の家を造ってくれた工務店も廃業しているなど、タウンページやインターネットを使って、地域外のリフォーム会社に電話をかけるような時代になってきている。